

佐野市の一地区における養蚕調査

飯塚 仁之助

一

実態調査の記述にさきだち、我が国における蚕糸業について記述することにする。昭和一、二、三、四年における輸出総額に対する繭糸類、絹織物、絹製品の割合は、実に四三・五三パーセント、四五・二二パーセント、四五・〇六パーセントとこれらはかつての輸出品の花形となっていたが、昭和三十一年、三十二年となるにおよんで僅かに三・四六パーセント、三・四四パーセント（第一表参照）と、いつしか昔の面影も消え失せ、蚕糸業は、いまでは斜陽産業の一つになってしまい、一方では繭糸価格の安定に關する臨時措置法の成立をみ、他方では、今年度の夏秋蚕

については、需給関係の改善をはかるための、前二カ年間の平均の二割の減産によって価格の維持をはからなければならなくなったにもかゝらず、その目的達成すら危ぶまれさらに一段の価格の下落を招くようになるのではないかとさえ思われるようになってしまった。これは、生糸にとってかわった化繊の登場が大きな原因となつたのではあるが、化繊の登場を余儀なくされた生糸は、その生産費の割高にあつた。従つて、これらの指数の推移、上繭価の米価に対する割合等を表を参照しつゝ記述することにしよう。

第二表は、昭和二十五年の生糸、人絹糸ビス、スフ糸の夫々の価格を一〇〇として二十六年ないし三十一年の価格を指数化したものである。この表から、生糸は最低の三十

佐野市の一地区における養蚕調査

(第 2 表)

年次	項目 生 糸 21中A格	人絹糸 120d	ス フ 糸 30 番 手
昭和26	146.2	139.3	102.6
27	147.5	92.4	63.0
28	155.8	97.6	59.5
29	145.0	91.0	51.0
30	134.5	75.1	46.8
31	129.7	97.8	53.0

(註) 昭和25年の夫々の価格を100とする。
資料 蚕糸に関する統計資料(昭和32年。
全養連)

(第 3 表)

年次	項目 上 繭 (一貫当り)	米 (一石当り)		対米比率
		円	円	
昭和1		8.35	33.03	0.253
2		6.03	28.41	0.212
3		6.48	27.08	0.393
4		7.06	26.61	0.265
5		3.10	16.72	0.185
6		3.03	16.54	0.183
7		3.53	20.45	0.173
8		5.28	20.24	0.261
9		2.46	26.71	0.092
10		4.50	28.04	0.160
11		4.94	27.70	0.178
12		5.15	31.24	0.165
13		4.79	32.99	0.145
14		10.15	41.68	0.244
15		10.31	41.95	0.246
16		8.31	49.00	0.170
17		8.42	49.00	0.172
18		10.62	62.50	0.170
19		12.71	62.50	0.203
20		28.00	300.00	0.093
21		112.00	559.00	0.200
22		364.00	1,959.00	0.186
23		784.00	4,561.00	0.176
24		876.00	4,850.00	0.181
25	1.068.00	6,305.00		0.169
26	1,504.00	7,382.00		0.204
27	1,743.00	8,524.00		0.204
28	1,957.00	10,355.00		0.189
29	1,547.00	9,748.00		0.159
30	1,554.00	9,855.00		0.158
31	1,570.00	9,970.00		0.157

資料 蚕糸業要覧(昭和33年. 農林省蚕
糸局編)

(第 1 表)

年次	項目 輸 出 総 額 (千円)	繭糸類・ 絹織物・ 絹製品合 計輸出額 (千円)	輸出総額 に対する 繭糸類・ 絹織物・ 絹製品の 割合 (%)
昭和1	2,044,728	890,070	43.53
2	1,992,317	900,865	45.22
3	1,971,955	888,532	45.06
4	2,148,619	953,407	43.77
5	1,469,852	497,549	33.85
6	1,146,981	407,880	35.57
7	1,406,992	445,866	31.62
8	1,861,046	474,757	25.51
9	2,171,925	395,137	22.69
10	2,499,073	499,865	20.00
11	2,692,976	499,547	18.54
12	3,175,418	517,272	16.29
13	2,689,677	436,320	16.22
14	3,576,353	579,492	16.21
15	3,655,850	505,495	13.82
16	2,650,865	275,090	10.38
17	1,792,543	73,445	4.10
18	1,627,350	91,524	5.63
19	1,298,198	53,249	4.10
20	388,399	7,020	1.81
21	2,260,407	812,001	35.91
22	10,148,004	1,318,256	12.99
23	52,022,102	12,402,032	23.83
24	169,841,045	12,515,662	7.37
25	298,033,210	27,651,485	9.28
26	488,776,775	27,183,490	5.50
27	458,243,197	27,281,105	5.95
28	458,943,408	23,955,409	5.22
29	586,525,032	28,140,902	4.80
30	723,815,976	32,212,159	4.45
31	900,229,011	31,125,393	4.46
32	1028,904,496	35,541,261	3.44

資料 蚕糸業要覧(昭和33年農林省
蚕糸局編)

(第4表)

年次	項目 生産費 米を100と した価格指数	上 生産費を100と した価格指数	備 考
昭和12	110	130	
13	116	95	
14	131	172	
15	104	143	
16	110	99	
17	113	90	
18	112	113	統制会社
19	96	60	
20	205	76	
21	85	54	
22	106	65	統制中
23	128	68	
24	92	56	
25	157	88	
26	143	120	
27	152	112	
28	150	100	
29	138	80	
30	163	86	
31	151	76	

資料 蚕糸業要覧(昭和33年、農林省蚕糸局編)

一年においてさえ一二九・七であるのに、人絹糸ビスは九七・八に、スフ糸は五三・〇と実に半値近くまで低落している。

上繭と米とのそれぞれの価格、ならびに対米比率を示したものが第三表である。この表をみれば、双方の価格とも、おゝむね上昇の傾向を辿っていることを観察することが出来るが、対米比率は、特に二十八年以後からは漸次小さな数字になっており、米価に比較して、繭価の上昇の程

度の低いことが推察出来る。

またこの二品目についての生産費を百とした価格指数(第四表)から、米価については、生産費以下の年は、昭和十二年ないし三十一年の二〇カ年に関して三カ年間にすぎなかったのに、上繭のそれは、一三カ年間もみられ、とりわけ、最近の三カ年についてそれをみれば、米価については、一三八、一六三、一五一と生産費をかなり上廻っているのに反し、上繭のそれは八〇、

八七、七六と一四パーセントないし二四パーセント生産費を下廻っており、米作に対比して、否、養蚕そのものの数字面からみても、これがいかに不利な産業であるかを理解するのに難くない。これが養蚕戸数の年々の減少の結果となつてあらわれ、農家戸数に対する養蚕実戸数の割合が、昭和一年から九年までは三五パーセントをこえていたにもかゝわらず、三十一年以後はその半数以下にまで減少してしまったのをはじめ、産繭量の戦前最高対比の数のいち

佐野市の一地区における養蚕調査

第 5 表

年次	項目	養蚕実戸数	戦前最高 対 比	農家戸数 に対する 養蚕実戸 数割合	産 滿 量	戦 前 最 高 対 比	桑園面積	桑園面積割合	
								対耕地	対 畑
		戸		%			町	%	%
昭和1		2,061,587	93.0	37.1	86,275,501	81.5	571,706.7	9.4	19.3
2		2,103,508	94.9	37.8	90,862,559	85.3	594,707.4	9.8	20.2
3		2,165,265	97.7	38.8	93,849,090	88.2	609,091.0	10.0	20.7
4		2,216,902	100.0	39.8	102,093,194	95.9	625,673.9	10.6	23.1
5		2,216,027	100.0	39.6	106,463,516	100.0	714,175.9	12.1	26.3
6		2,119,908	95.6	37.6	97,072,455	91.2	682,902.8	11.5	24.9
7		2,064,639	93.1	36.6	89,550,337	84.1	652,514.2	10.9	23.5
8		2,092,187	94.4	37.2	101,163,566	95.0	640,178.0	10.6	22.8
9		1,995,492	90.0	35.5	87,139,796	81.8	623,000.1	10.3	22.1
10		1,894,647	85.5	33.8	82,066,053	77.1	582,336.6	9.6	20.5
11		1,856,551	83.7	33.2	82,892,193	77.9	566,230.6	9.3	19.7
12		1,818,552	82.0	32.6	85,972,363	30.8	561,072.4	9.2	19.5
13		1,696,306	76.5	30.7	75,256,286	70.7	549,519.7	9.0	19.1
14		1,651,478	74.5	30.1	90,818,486	85.3	533,380.1	8.8	18.6
15		1,645,030	74.2	30.0	87,546,383	82.2	533,918.9	8.8	18.6
16		1,591,518	71.8	28.8	69,848,597	65.6	494,449.1	8.2	17.3
17		1,426,416	64.3	25.7	55,851,087	52.5	612,624.0	6.8	14.6
18		1,300,122	58.6	23.1	54,036,369	50.8	363,960.8	6.1	13.0
19		1,138,771	51.4	20.4	40,312,061	37.9	304,670.7	5.2	11.3
20		1,004,348	45.3	...	22,569,552	21.2	242,086.4	4.5	10.3
21		876,475	39.5	15.4	18,209,035	17.1	186,258.4	3.5	7.9
22		819,850	37.0	13.4	14,260,797	13.4	176,225.9	3.3	7.3
23		827,246	37.3	...	17,082,163	16.0	180,173.1	3.4	7.6
24		813,837	36.7	...	16,516,340	15.5	173,151
25		834,628	37.6	13.5	21,444,029	20.1	176,198	3.5	8.0
26		829,737	37.4	13.6	24,905,073	23.4	178,310
27		796,749	35.9	...	27,545,718	25.9	173,380	3.2	7.2
28		809,858	36.5	13.2	24,824,064	23.3	175,000
29		809,221	36.5	13.3	26,750,573	25.1	182,093
30		808,520	36.5	13.4	30,499,560	28.6	188,856
31		789,732	35.6	...	28,845,007	27.1	192,813

資料 蚕糸に関する統計資料（昭和32年、全養連）

佐野市の一地区における養蚕調査

(第 6 表)

年次	項目	春 蚕			夏 秋 蚕		
		養蚕戸数	掃立卵量	産 繭 量	養蚕戸数	掃立卵量	産 繭 量
昭和26		103	1,840	2,086	116	2,165	2,449
27		107	3,100	3,075	142	3,372	3,126
28		119	3,235	2,469	161	3,437	2,675
29		110	5,270	3,121	133	4,175	2,793
30		120	4,120	3,240	147	4,980	3,611
31		105	3,820	2,653	183	5,879	4,017
32		103	4,310	3,508	160	5,015	2,910

資料 蚕糸統計綴 (栃木県庁蚕糸課)

(第 7 表)

年次	項目	春蚕(一戸当りの掃立卵量)		夏秋蚕(一戸当りの掃立卵量)	
		A 地 区	全 国	A 地 区	全 国
昭和26		17.9	22.4	19.7	25.0
27		29.0	25.4	23.7	29.4
28		27.2	23.7	21.3	29.7
29		47.9	25.6	32.1	30.2
30		34.3	27.0	33.9	36.8
31		36.4	28.1	32.1	39.8
32		41.8	31.6	31.3	42.1

資料 A地区については、第6表から算出した。
全国に関するものは、蚕糸業要覧(昭和33年、農林省蚕糸局編)による。但し31年、32年の数字に関しては卵量1箱を11.7gとして換算した。

夏秋蚕の一戸当りの掃立卵量と全
掃立卵量と全国のそれ、ならびに
が、この地区の春蚕の一戸当りの
むね増加の傾向を辿ってはい
にもかゝらず、後者の数はお
前者の数は比較的增加してはい
養蚕戸数よりも常に少く、しか
では、春蚕の養蚕戸数は夏秋蚕
あり、この七カ年を観察する限り
量は第六表に示されている如く
降の春蚕、夏秋蚕についてのそ
A地区における昭和二十五年以
合は一五パーセントであった。

二

照)。 じるしい減少、あるいはまた、桑園面積対耕地ならび畑 に対する数字の減少となつてあらわれている(第五表参

このたび行つた調査の対照は、佐野市の一地区(A地区 とする)である。此の地区の昭和三十年現在の全戸数は二 〇五二戸、農家は七九一戸、うち養蚕業を営んでいる家は 一二〇戸であった。従つて農家戸数に対する養蚕戸数の割

佐野市の一地区における養蚕調査

国のそれとを比較すると、前者については、昭和二十六年、二十七年の二カ年以外は、すべて全国のそれよりも多いのに対し、後者については、常に全国のそれよりも少いことが、第七表から知ることができる。

蚕糸業が斜陽産業の一つになってしまったことは、すでに述べたところであるが、ではA地区の養蚕家は、いかなる目的によつて養蚕を営んでいるか、これが今度の主たる調査の目的である。

本調査は、昭和三十二年養蚕を行った戸数一〇五戸のうちから、任意にその三分の一、すなわち三五戸を抽出したものである。調査は、(1)養蚕の継続年数、(2)養蚕の中止した年の理由、(3)蚕の飼育者(但しこゝでは、主として桑を与えるものだけに限定)、(4)搥立卵量、(5)繭の自家使用程度、(6)繭の販売による収入の一年間総収入に占める程度、(7)繭の販売による収入の、日常生活費に使用した程度、ならびに(8)養蚕を行った目的の八項目(但し(3)以下は三十二年一カ年だけに限定する)からなりたっており、無記名記入の方法を採用した。この調査の結果は第五表から第十五表

までに示されている。いまこれらの表の順をおつて考察することになしよう。

(第 8 表)
養蚕を行った継続期間

1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6年以上
0	2 戸	1 戸	0	1 戸	31 戸

(第 9 表)
養蚕を中止した年の理由

養蚕を継続している	養蚕を中止したことがある			
	桑が不足だから	繭が安いと思つたから	人手が不足だから	その他
22 戸	4 戸	4 戸	4 戸	1 戸

(第 10 表)
蚕の飼育者

祖 父	祖 母	父	母	祖母と母	父と母
1 戸	4 戸	2 戸	24 戸	3 戸	1 戸

養蚕業という産業は、桑を使用するとする性格からも推察出来るように、他の農作物のようには年々変更出来るものではない。従つて養蚕を始めてから五年以下の戸数

は僅かに四戸にすぎなく他はすべて六年以上である。(第八表参照)

つぎに、養蚕を中止した戸数とその年の理由を調査した結果が第九表であるが、これを見ると霜害その他の理由で桑が不足のため養蚕を行なわなかった家、繭が安くなると思つて中止した家、人手が足らなくなったから中止した家がそれぞれ四戸、その他の理由によるものが一戸、従つて残りの二二戸は、養蚕をはじめてから毎年継続飼育している家である。こゝでとりわけ注目すべきことは、繭が安くなるのをおそれて四戸、すなわち約一割の家が、中止したことがあつたという事実であろう。

では蚕の飼育の世話は、通常誰れが行っているのだろうか。この地区では、養蚕は通常総て自家労働によつて行なわれ、他人の労働を使用していないということが、一つの特色かもしれない。これは、自家労働で補える程度の規模でしか営まないということを意味する。また、主婦がこの仕事に携わる家が二四戸と圧倒的に多く、祖母、祖母と母、父がこれに続き祖父、父と母の順となつてゐる。

(第 11 表)
昭和 32 年の 掃立卵量

50g 以下	50~80	80~110	110~140	140~170	170g 以上
6 戸	15 戸	7 戸	1 戸	5 戸	1 昭

(第 12 表)
繭の自家使用程度

全 部	大部分	半分位	小部分	ほんの わづか	少しも使 わない
0	0	0	2 戸	6 戸	27 戸

(第 13 表)
繭の販売による収入の、一年間総収入に占める程度

全 部	ほとん ど全	大部分	半分位	小部分	ほん づか
0	0	1 戸	4 戸	24 戸	6 戸

三三年の一カ年間の掃立卵量を五〇瓦以下、五〇〜八〇瓦、八〇〜一一〇瓦、一一〇〜一四〇瓦、一四〇〜一七〇瓦及びそれ以上の六階級に区分すると、五〇〜八〇瓦が一五戸で全体の約四二・八パーセントを占め、つゞいて八〇〜一一〇瓦、五〇瓦以下、一四〇〜一七〇瓦の順になり、一一〇〜一四〇瓦と一七〇瓦以上とはそれぞれ一戸である。

産繭の自家使用程度をつぎに調べてみることにしよう。
産繭量の小部分を自家使用する家が二戸、ほんのわずか使用する家が六戸、残り二七戸は、産繭量をすべて販売したことが第一二表から知ることが出来る。

産繭量の全部、ほとんど全部ないしは大部分を販売するために養蚕を行っているとするれば、各家庭の一カ年の総収入のうち、繭の売上金などの程度占めているか？問題となる。この地区においては、総収入のうち、繭の販売による収入が小部分を占めている家の数が圧倒的に多くて二四戸すなわち全体の六八・六パーセントを占め、ほんのわずか、半分位がこれにつづき、大部分を占めている家の数はわずかに一戸である。

第一四表は繭の売上金が日常生活費にどの程度使用されているかを示すものである。この表で一番大きな数を示しているのは、その大部分を生活費に使用する家で一一戸、二位が「半分位」で九戸、つぎが「ほとんど全部」の七戸、「小部分」がそれより一戸少くて六戸、「ほんのわずか」が二戸である。

(第 14 表)
繭の販売による収入の日常生活に使用した程度

全 部	ほとんど全	大部分	半分位	小部分	ほんのわずか	少しもない
0	7 戸	11 戸	9 戸	6 戸	2 戸	0

(第 15 表)
養蚕を行った目的

その他	善し具す	改ら機入	生活新農	生やいを	生活費に	子供の学	嫁入の買	娘の道具	祖母、母、小	短期間得	比較的現	のいにく	田畠的そ	となに	あまりは	あとい
1 戸	5 戸	35戸	1 戸	2 戸	6 戸	20 戸	23 戸	16 戸	6 戸	6 戸	23 戸	16 戸	6 戸	1 戸	1 戸	1 戸

養蚕を行った目的について調査の結果は、最後の表、すなわち第一五表である（こゝでは適している箇所には、いくつでも印を付けるように注を付しておいた。従って各項の戸数の合計は調査

戸数とは合致していない)。第一四表からもわかるように、繭の売上金の何割かを日常生活費に使用するために養蚕を行っている家は、調査戸数全体で養蚕を行った目的の最大の数を占め「田畠の比較的にいそがしくないとときに飼えるから」、「短期間に現金になるから」、「あまりとくではないが他に適したものがなければ」等が調査戸数の約半数ないしそれ以上を占めている。また「わりあいとくだから」と「祖母、母、娘等の小使いかせぎとして」が共に六戸、「生活改善や新しい農機具を購入するため」「娘の嫁入道具を買うため」がこれにつぎ、最後が「子供の学費のため」と「その他」の理由によるもので共に一戸である。

以上で本調査の記述を終るのであるが、『昭和三二年産繭生産費調査成績』（昭和三三年、全養連編）に記述されているように「平均販売単価一、五六一円で採算のあう農家は全体の二三％程度に過ぎないことがわかつている。つまり約七七％の農家が、自から要した生産費以下の価格で繭の販売を行っているということであり、その結果は、自家労賃を始めとする自給費用、或は償却関係費用の喰

込みとなって表われている」とすれば、この地区において「わりあいとくだから」と「あまりとくではないが、他に適したものがなければ」によるものの数が併せて二戸で、調査戸数の六二・九パーセントを占めている結果がみられるのは、自家労賃や自給費用等を生産費の算定に際して考慮しなかったためであらうか。それはともかくとして、産繭量が増加の傾向を辿り、国内需要・輸出等がそれに伴わない結果、売手市場から買手市場に変わった現在、この地区にも一部には二眠までの共同飼育場もみられるようになったものゝ、一層の合理化を企て、生産費の低下を図らなければ、この地区と限らず我が国の蚕糸業は益々困難な道を辿らなければならなくなるであらう。

なお、第一三表「繭の販売による収入の、一年間総収入に占める程度」と第一四表「繭の販売による収入の、日常生活に使用した程度」とは、最初はともに百分率での記入を希望したのであるが、それぞれの数字を得ることができなかったため、表にみられるような区分にせざるをえなかった。